

---

# 酔 迷 宮

pinkmint

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

酔迷宮

### 【Nコード】

N1708BA

### 【作者名】

pinkmint

### 【あらすじ】

自分の起こした暴力事件から、芸能人としての危機に立たされた青年。

彼が課されたペナルティは、いちど堕ちたら抜けられない

「秘密の花園」の接待を受けることだった。

巨悪の影を感じながら、主人公は迷宮の住人、異国の少女の手をとり未知の世界へ足を踏み入れる。

前作「墨といちじく」の続編です。そちらを知らなくてもこれ自

体で独立して読めるようにはしてありますので、まずは一話目だけでも覗いてみてください。刺激的な表現が多いですが、基本はプラトニックラブ……  
の、つもりです。

## 序章 ハニー・ガーデン（前書き）

（小説中に引用している讃美歌は一応著作権フリーを確認してあります）

> i 3 8 4 5 9 — 1 0 9 4 <

## 序章　　八二一・ガーデン

夕暮れ時、そのベッドに座ると、いつもきまって窓から聞こえてくる掛け声があった。

マッチョコーウ。マッチョコーウ。

甲高い複数の女性の声。楽しげで、音楽のようで、いつも同じ調子で。

ぼーんぽーんというテニスボールの音が、あたりの建物に反響する。窓際のサンキヤツチャーが、レースのカーテン越しに斜めに入る西日を受けて、虹のかけらのようなプリズムをまっしろな室内にばらまく。部屋のふた隅の花台におかれた白い陶器の花瓶には薔薇の花がこぼれんばかりに活けてあり、その花色が斜めの日差しを受けて白い壁にうすむらさきに映る。

部屋の隅に置かれたテレビの平坦な画面の中では、近く行われるライブの宣伝をする、人気歌手のインタビューが映し出されている。SYOUさん、これが最後のライブということでファンの方々も残念に思っているのではないですか？突然の発表ですが、これから俳優業に専念という……。

いえ、その先のことは今は考え中です。新たなスタートととらえていただければ。

百平米ほどの専有面積を全面改装したそのマンションは、応接スペースとかんたんなキッチンのほかはベッドルーム大小二つに小さな洋室、広いバスルームで構成されており、ベッドルームの一部始終はその洋室からモニターでチェックできるようになっていた。

部屋のドアが開く音がする。ベッドに腰掛けて一心にテレビに見入ったまま、少女は振り向かない。入ってきたのは細身を黒のニッ

トで包んだ、頬に傷のある、顎の尖った男だ。

少女の背後から、男の細い手が伸びて、いつもの目隠しで無造作に目を覆う。柔らかな布の肌触りとともに、視界が闇に閉ざされる。いましがたまで見ていた画面の向こうの青年の美しい面影が、目の内側に残る。

「いいですね。若いお嬢さんたちは、楽しそうで」男がぼつりとつぶやく。

マンションの向かいは良家の子女が集う有名な女子大で、テニスコートの横はチャペルになっていた。

「なんていつてるんだろっ、あれ」

「もいつちよいこっ」

少女は小声で歌うように答えた。

「なるほど。いつも聞いているからわかるんですね。羨ましいですか？」

少女は下を向いて首を左右に振った。

呼び鈴が鳴る。

「さて、おいでだ」

男がテレビのスイッチを消す。

いつも無感動な男の声は、群青のびろっとうのような感触を耳に残す。その耳にゴム製の耳栓がきつく刺し込まれる。これで視覚と聴覚を奪われることになる。残るのは、触覚と、嗅覚。

よりどころのなくなった体が少ない情報にしがみつく。ふたつの感覚が急に鋭敏になってゆくのが自分でもわかる。

……あ。

柑橘系の、それでいてどこかスパイシーな、シプレの香りがする。お香をも思わせる、和的で落ち着いた香り。のびやかで、たおやかで、それでいて芯のある、大人の女の香り。

ふわりとふわりと周りの空気が動く。服を脱いでいるのだろうか。少女は薄い絹の、薄桃色の夜着を一枚、素肌にまとっているだけだった。

指の感触が首に触れ、なにかベルベットの首輪のようなものが首に巻かれた。

ふいに、耳栓が外される。

「こんなものがあつたらお話できないわ」

やはり、女のひとだ。遠くのほうから、いいんですかと男の声がある。

「いいのよ、そこらへんはこちらの自由でしょ。わたしこの常連さんと違ってそんなに有名人でもないしね。もういいからあっちに行つてちょうだい」

声のほうに首をめぐらすと、首輪についた鈴がちりと鳴った。

「かわいいわ」

指が、ベッドに座つたままの少女の夜着の前開きのボタンをすいすいと外してゆく。すると絹が体を下りて行き、素肌に空気が当たる。テニスボールの音は止み、聖歌が聞こえてきた。

「いい環境ね」

足首にも同じものが巻かれる感触がある。

「立って」

立ち上がると、ごく自然に服はすんと足元に落ちた。手を添えて、絹のかたまりから女が少女の足を抜く。足首からもしゃんと軽い音がする。

下着をつけていないので、身にまとっているのは鈴つきの首輪と足輪だけだ。

ああ、自由になった。

少女はいつも思う。身にまとっているものには、それがどんなものであれいつも抵抗があるのだ。なにかも脱ぎ捨てて、ああ、これで自分はささやかに自分だけになったと思う。

「なんてきれいな。しなやかで、猫みたいな体ね」うつとりと、シプレの香りの主が言った。

「いつも男たちにいようにされているんでしょう。今日はあなたのしたいようにしてあげるわ。してほしいことを言つてちょうだい」

「してほしいこと……」

少女は首をかしげて考えた。そんなことを言われたのは初めてだ。女の手が髪に触れ、高い位置で留めていた髪留めを外した。アップになっっていた髪がほどけて背中にふさりと落ちた。

「背中を撫でてください」

「……背中を？」

表皮の冷たい、ふくよかな腕が少女の体に回された。薄いサテンのような柔らかい布の、胸元のフリルが少女の乳首をくすぐった。ふるりと、体の芯が震えた。

女の手が少女の背中を滑る。なめらかな背骨のラインに沿って掌がゆっくりと上下する。五本の指が広がって、何かの楽器を奏でるようにやさしくそれぞれの線を辿る。その感触の優しさに、少女の奥にある何かの琴線が切ない音で鳴った。

「いい子ねって言うてください」

女は含み笑いをすると、少女の耳元に口を寄せた。

「いい子ね」

「……たくさん」

「いい子。ほんとうに、お前はいい子」

しつとりと、瞑想を誘うような深い香りが少女を包む。

少女はそつと女の背に手を回して胸に顔をうずめた。

「いい子よ」

女は少女の頬に唇でふれた。少女は顔を動かし、その唇に自分の唇を寄せた。かるくふたつの吐息が絡まり、そしてすつと離れた。

「もう、どうしようかしら、この子」

女は感に堪えないという風につぶやくと、そのまま少女の体を柔らかなベッドの上にゆっくりと倒した。

絹糸のような髪をもみくしゃにしながら、今度は小さな花の蜜を吸い尽くそうとするように、薄紅色の唇に自分の唇を重ね、舌で口内を弄る。少女の口内は春の青草のように香り、きれいにそろった歯が開いて優しく女の舌を受け止めた。



「そんなにかわいらしい注文をするような子が、こんなお仕事をしてるなんて、胸が痛いじゃないの。あなたを幸せにしてあげたくて、この身がはちきれそうだわ」

そつと唇を離して呟く女の息からは薄荷煙草の匂いがした。ちりんちりん、しゃらんしゃらんとかすかな鈴の音が室内に響く。

音は視覚の記憶を刺激する。突き上げる錫杖の先の遊環、猛々しく首を振りながら舞う獅子の首の鈴の音、火花を散らす爆竹と銅鑼の音、闇を切り裂いて青くうねる夜光龍の残像、窓辺に下がる赤い唐辛子の飾り物。

少女はどんな目に遭わされるのも、別に嫌いでもいやでもなかった。

外に出ている部分でも体内の部分でも、女としての器官を、何の感情も載せずに刺激され、蹂躪され、あるいは貫かれることが、いやではなかった。

どこにおいてあるのかわからない心と体が瞬時につながる、奇跡のような瞬間。どこにも届いていないのに、何かに届いた気がする、自分の生に手を伸ばしてつかめた気がする、あの目くらむような快感。まずしい精神をおきざりにして自分は肉となる、そしてすべてから許されて自由になる。たとえ錯覚であつても、その瞬間が嫌いではない。

でも。

背中を滑る手が触れるのは、もつと奥。記憶とか感傷とか、寂しさとかせつなさとか、そういうもの。ひとすべりするたびに、何かの痛みのスイッチが入る。ひとの指にはいつも、魔法が宿る。肉の奥の鼓動とシンクロした瞬間、それは秘密の箱を開ける鍵となる。いい子、いい子、お前はいい子。そうくりかえしいわれたのはいつのことだったろう。あれは誰だったんだろう。

無限に許されて自由だった、誰かのことがただ大好きだった。その記憶が、毎日思わない日はないテレビの向こうの愛しい人への焼けるような思いとないまぜになり、内側から身を焦がす。会いたい、

あのひとに会いたい。

少女の背を滑っていた手が、前に回り下に降り、ささやかなその窪みを通して、その下の茂みに埋められた。

少女はちいさな声を上げて、弾けるように背をのけぞらせた。

「やさしいひとはこれでおしまい」

左右に振るその首の鈴のがちりんちりと鳴った。

讚美歌は、まだ続いている。

「今日は爪を切ってきたのよ、あなたのために。

あなたを知ると後戻りができなくなるといううわさを聞いてきたの。素敵じゃない。楽しみだわ」

……ありがとう。わたしは許される。

もつと来て。わたしは肉になる。

そしてわたしの鍵を開けたら、今度はあなたを帰さない。

ようこそマダム、ハニー・ガーデンへ。

……まぼろしの影を追いて うき世にさまよい  
うつろう花にさそわれゆく 汝が身のはかなさ

春は軒の雨 秋は庭の露

母はなみだ乾くまなく 祈ると知らずや

おさなくて罪を知らず むねにまくらして  
むずかりては手にゆられし むかしわすれしか  
春は軒の雨 秋は庭の露  
母はなみだ乾くまなく 祈ると知らずや



## ボンベイ・サファイア・ブルー

コリアンダー、アーモンド、リコリス、オレンジピール。

薫り高い草根木皮から抽出された香りが、花に近い芳香となって体内から鼻腔へ抜け、胃に小さな陽を灯す。

陽は無数の小さなともしびを全身にゆるりと運び、まだやれる、大丈夫まだいける、行こう、前へ行こうとやさしく語りかけてくれるのだ。

この薄青い綺麗な液体を敵視する理由がどこにあるだろう。

SYOUはボンベイ・サファイアの栓をきゅっと締め、紙袋に入れると個室のドアを開けた。

トイレから出ると、二千人収容のホールの方向からマイクのハウリング音が響いてきた。不機嫌な鉄の箱はわんわんと音を反響させ、テストテストというスタッフの音が、きょうが何の日か、だるい頭に念を押してくる。

この音を聞くのも今日が最後。

ばしばし頬を叩いてから控室の扉を開けると、マネジャーの哲夫がノートパソコンから顔を上げた。

「長いトイレだったな」

「とつといて」

ぐしゃりと口を握りつぶした紙袋をSYOUがぞんざいに渡すと、中を覗いた哲夫が呆れた声を出した。

「おい、……こら」

「四十七度」

唇に薄い笑いを浮かべながらそういつてビニールのソファに腰を下ろし、SYOUは長い足を投げ出した。

「ちよつと景気づけにひっかけてきた。手元にあると誘惑に負けちゃう。さすがにちびちびやるにはきつい度数だし、預けることにす

る」

「捨てるぞ」

「どうぞ」

SYOUは天井を見上げた。

「それは俺の首輪につける縄みたいなものだから。ほどこいたら最後、金輪際どの収容所にもひきずっていけやしない。」

大丈夫、ライブが終わればジンに頼るのもやめるよ」

「順番が逆だろう、ライブの間こそやめるべきじゃないのか。収容所って、ステージのことじゃないだろうな」

「違う。そのあとのお勤めの話」

「……あれか」

小声で言うと、哲夫は紙袋を自分の鞆にしまった。

「まあ、その話はやめよう。社長だって本当はあんな糞接待は止めたかったんだ、最後まで回避の方向を探してた。それはもう必死にだが、もうどうしようもなかった」

「わかってる、全部俺が撒いた種だ。……全部、俺が悪い」

哲夫は、仰向けになって天井を見ているSYOUに向かって言った。

「俺は正直残念だよ、音楽活動停止っていうのはな。これだけはつけさせてやりたかった。歌ってるお前を見るのが好きだった」

目を閉じたたまま、SYOUは口を開いた。

「いつかこんな時が来るとは思ってたんだ。どんなことにも、始まりがあつて、終わりがある。一日も二十四時間ワンサイクルでいちいち終わりが来るから、人間は次の日も生きられる。来世がほしいとは思わないけどね。」

正直、勢いだけでここまで来られるとは思わなかった、自分としてはもう限度だ。幕を降ろすにはいい機会だよ」

哲夫はレモン入りのミネラルウォーターの入ったシャトルの蓋を開けてSYOUに手渡した。

「……お前と初めて会った時、あれはもう四年前か、歳のわりには

結構大人びてると思ったよ。でも今思えば、あの時のままいくつになっても成長してないともいえる。お前は年の取り方がいびつだな」  
SYOUは喉を鳴らしてレモン水を飲み干した。

「ああ、……美味い」

「少しはアルコールは抜けたか」

口元を拭くと、SYOUは哲夫に人懐こい笑顔を向けた。

「今回のことでは事務所のみんなに迷惑かけっぱなしだったからね。来た観客全員にこれが最後と信じたくないと思わせるようなライブにするよ。特に、一番世話になった北原哲夫氏のために」

「……そりゃあ光栄だな」

「さて、と」

シャトルを哲夫に投げ返すと、首と肩をぐるぐる回し、ばんと音を立ててSYOUは控室のドアから出て行った。廊下から、バンドの連中と朗らかに挨拶している声が聞こえてくる。

哲夫はしばらく時計をながめたあと、ステージ脇に回り、袖から舞台上のSYOUを見つめた。

サファイア・ブルーの光に彩られて浮き上がる横顔は、名工の手で彫り上げた彫刻のようで、何度見てもそのたびに感嘆せずにはいられない。

……お前はときどきさつきみたいに、胸がうずくような笑顔を見せる。それがどれだけ破壊力を持つか、今まで一度も自覚したことがないような顔をして。

「……そこところはサス残していきたいんだ。ソロのドラムの敦に光残して。で、三曲目との間はクロス・フェードだろ、光も途絶えないように。シーリングスポットはそこ青めでよろしく。で、スクリーン換える間に紗幕降ろす、そのタイミングが昨日は遅かったよね。ちよつとそこまで通しでやってみて。あとポップノイズがひどいのが気になった、ちよつとタカさん、その位置でタチツテト言ってくれない。マイクとの距離の見当つきたい。で、位置決めた

らバミっという（＊）」

こうして見ると、素直で健康なただの青年だ。

……こいつが見てくれの通りであつたら、あんなことは起きなかったのに。

それにしても、ひとつのキャリアを失おうとしているというのに、妙に清々しく、そして漂う気配も暗くない。こいつはもうほかの何かに照準を定めたのか。それとも何も考えていないのか……

哲夫の耳に、三週間前SYOUからかかってきた電話の、切羽詰まった声色が蘇る。

あの大失態の落とし前としてライブを今回限りで打ち切ると決められたとき、読めない無表情の中に、何かほっとしたものがあつた。

嵐のようだったあの一夜、彼は何を失い、何を見つけたのか。とにかく、このステージが、彼がどうしても失いたくないものでなかったらしいのは確かだ。

最初からそうだった、社長が彼を連れてきたときから、ギターを抱えてはいたものの、どこへ向かったらいいのかわからないという顔付きをしていた。

有名になりたいかと聞かれ、金が欲しいと素直に答えた。

社長は笑って、必ず稼がせてやると言った。

そしていま、その通りにはなつた。……だが。

彼が手にした招待状が、どれだけやつかないな世界への入り口か、たぶん自分よりも社長がよく知っている。ちくしょう、ちくしょうと呟きながら、社長が頭を抱えているのを初めて見た……

……哲夫は胸の中で、端正な横顔に呼びかけた。

SYOU。

今日で歌手としてのお前は終わる。だが、そのほかの分野でむしろ人気の出過ぎたお前には大した痛手ではないだろう。

しかし、お前が明日向かわねばならない場所がどれだけやばいところか、詳細をきかされていない自分にも気配で伝わってくる。

今日は歌え。そしてそののち、どこへいこうと、……とにかく帰ってこい。

俺は見たい。この世界を泳いで、お前が最終的にどこの高みへ向かうのか。



ボンベイ・サファイア・ブルー（後書き）

\*バミル …… ステージ上の位置をテープなどでマークしておく

## 蓋

話は三週間前にさかのぼる。

その夜、三月にしては寒すぎる雨が梅の花を散らし始めていた。

ツアーの最後を飾る東京ライブを三週間後に控えて、SYOUは赤坂のスタジオでのセッションを終え、どこかでビールと動物性脂肪質でも補給しようかとツアーバンド仲間と話し合っていた。

「下に、……また、来てるみたいだけど」

自販機に飲み物を買って行ったギターのダイが、戻ってくるなり口ごもりながらSYOUに耳打ちした。一瞬息を止め、SYOUはため息交じりにつぶやいた。

「……参ったな」

手早く帰り支度を整えてエレベーターで一階に降りる。ホールの隅の自動販売機の横で、バーバリーロンドンの膝丈のトレンチコートに黒い革のブーツの女が、壁に背をもたせかけて携帯を覗いていた。

立っているだけで目立つのは際立ったスタイルのせいだ。ダークブラウンのロングヘアが緩やかなウェーブに小雨のきらめきに乗せて半分顔を隠している。

「詩織」

小声の呼びかけに顔を上げると、女は少し笑った。

「今日はきみも仕事だっていつてなかったっけ」

「もう済んだわ、簡単な撮影だもの」

「で、何の用」

「私物を取りに行きたいのよ。あなたの部屋にわたしのもの、まだいろいろあるし」

「じゃあ送るよ。どこに送ればいい。実家？」

詩織は少しため息をつくようにすると、黒目がちの目でSYOUを見上げた。

「……冷たいのね。今ホテル住まいだし送られても困るわ。自分で選びたいの。いらないものはあなたが捨てるか使つかして。それとも新しい女でもいて来られると困るの？」

「今いないよ、そんな暇もないし」

「わたしも、ただ私物を引き取ってけじめをつけたいだけ。さくつと、いいよつていいなさい。いいじゃない、それぐらい」

なし崩しにいつの間にかタクシーの後部座席に並んでいた。

伊藤詩織。有り余る程の金を持ち、お嬢様大学の大学院に通いながら、モデル兼女優として最近名が売れ始めた、……一週間前に別れた女。

彼女のどこがよくて、飽きっぽい自分が一年も続いたのかよくはわからない。

だが、こうして並んで車に乗っていると、そしてその横顔を見ていると、言いようのない後ろめたさが胸に押し寄せて来る。

人生の転換期に立っていた十四の頃、何度も自分を車に乗せては説教をしてくれた恩人の女性がいる。その面影に、ほんの少し、彼女は似ているのだ。

もちろん、偶然。そう、付き合ってから気づいたことだから、偶然。

お前が付き合ってるあの女のことだけど、と、私生活にはあまり口出ししない関岡社長が珍しく言い出したのは二月末のことだった。

……あの女が誰だかわかってるのか。構成員が一万人を越える広域暴力団、権田組の組長の娘だぞ。

妾腹の隠し子とはいえ、その母親が早くに病死して不憫だからと金ばかりを与えた結果、手が付けられなくなってるお嬢だ。暴力団規制法が施行されてから取り締まりが強化されてきた現在でも、なお権勢を誇っている唯一の組だ。

いいかげん、現実を見て距離を取れ。あの娘はいろいろとヤバす

ぎる。

そのころ、二人はよくけんかをしていた。たびたびできる顔のひつかき傷を見かねた社長が、今まで大目に見ていたSYOUの交際に口を出したのだ。朝顔の花が萎むように、そのころ、詩織の肌や気紛れな性分に対する興味も執着も枯れかけていた。

……もう終わりにします、ちょうど愛想を尽かされかけてますから。そう答えると、社長は心からほっとたような顔をして、そうかと笑った。

忠告を受けた翌日、SYOUは部屋で早速別れ話を切り出した。詩織は覚悟していたように、冷めた目で聞いていた。

……結局わたしのことなんか好きじゃなかったのよね、はじめから。誰のことも好きになんかなれないくせに。

その通りだ、ごめん、俺には恋愛の資格がないらしい。だからちゃんと優しくしてくれるいい男を探してくれ。

率直にそう答えたら、いきなり灰皿が飛んできた。それから平手打ち。SYOUの載っている雑誌を本棚から引き抜いては泣きながら床に叩きつける彼女を見ていて、心の中で、ああまたこれか、とため息をついていた。

初めて一緒に食事したとき、飲んだのがたまたまとびきり美味しい酒で、酔いに任せて近くのビルの屋上に上がり、この世から爆弾で吹っ飛ばしたいものを叫びあった。非常階段で知っている限りの歌を歌った。公園の池沿いの道を歩いていた亀を拾い、ケロリンの洗面器で飼った。刃のように容赦のない彼女の物言いと、時折見せる子どものような笑顔が好きだった。

宝物を探すように、都会の片隅の、自由の片鱗を二人で拾い集めた。楽しかった。

彼女を見ていたかったし、幸せにしたいと思った。それが自分の都合でも、どこに根差すものでも、その瞬間の気持ちに嘘はなかった。それでもいつの間にか二人の間に風が吹き始め、女が寂しい寂

しいと訴える回数が増え、それが重荷になって関係は終わる。どうしていつもうまくいかないのだろう、自分も寂しいのは同じなのに。

「なんだかなつかしい、この匂い」

SYOUのマンションの部屋に入ると、詩織はモノトーンを基調とした無機質な室内を見廻しながら言った。

「わたしがバリで買ったフランチパニの石鹸と、あなたのキャスタが混じりあった香り。ついこの間まで住んでたのに、もう遠い昔のことみたい」

「……」

「服にね、この部屋の香りが染みついているの。バッグにもよ。だんだん薄まっていくのが切なくてね。マフラーなんて、洗えもしないや捲けもしない。バカみたい」

黙って突っ立っているSYOUを振り向いて、詩織は言った。

「警戒しないで、また住み着こうなんて思っていないから。でもひとつだけ聞かせて。わたしのこと、ほんとに、好きじゃなかった？」

「……いいや」

「最初は好きだった？ 少しは思ってくれてた？」

それとも、わたしの親が普通の親だったら、こんなことにはならなかった？」

詩織が少しずつ買ってきては大事に水をやってきた鉢植えの花々が夜の窓辺に並んでいる。それを眺めながら、SYOUは答えた。

「親がだれかなんて、俺には関係ない。」

昔から、好きって感情がよくわからないんだ。誰かに好きだと言うと、そのあと、その言葉に交じってるかもしれない嘘が気になって、申し訳ない気持ちになる。心の中が不純物だらけで、自分の本音がよく見えない。自分にそれを言う資格があるのかとか、面倒なことを考えちまう。

でも、一緒にいたいと思ったし、きみを見てると、……幸せだった」

詩織は目を細めると、ふうつと細いため息をついた。

「それを聞きたかったの。ありがとう。」

楽しかったよね、ちよつとの間だけど。……わたしも、幸せだった」

うつすらと涙の浮かんだ詩織の瞳は、愚かなことにこれまでで一番きれいに見えた。

「ねえ」

「うん？」

「最後にキスして」

「……駄目だよ」

「そこで止める自信がないから？」

詩織は微笑みを含んだ目で見つめながら、SYOUの腰に手を回した。

「あなたの帰りをここで待ち続けて、死にくなった夜がいくつもあったのよ。」

退屈しのぎにネットを開いたら、SYOUと女優Eがホテルのバーなうとかツイッターに爆撃されて、部屋に火をつけたくなったことも。

それを全部がまんして、おまけに忘れてあげるっていうんだから、ひとつくらい置き土産をくれてもいいと思う」

SYOUの頬を両手ではさみ、詩織はきゅっと目を閉じて唇を突き出した。付き合い程度に唇で触れると、いきなり力を込めてSYOUの頭を抱え、まるで息の根を止めようとするかのように強引に唇をむさぼる。思わず目を閉じて、無意識に上がった両手を、いつもの動きをなぞるように詩織の背中に回していた。

「……好きだったのに。本当に、好きだったのに。あなたはもう、わたしは本当に、本当に……」

「……ごめん」

恋というものが持続を求められるものではなく、ただ今、その刹那の深さだけではかれるものならば、自分は何度もきちんと、心か

ら人を愛したのに。そのつもりだったのに。永遠だと思ったものはいつもあつという間に形を変えてゆき、その変化を誤魔化すことが自分にはできない。こうして、涙に濡れた頬を胸に押し付けられても、時間は戻せない。

それでも、自分の内部に行けばいくほど温度の下がる冷えた精神構造の中心に、その夜はめったに灯らない灯りが灯っていたとSYOUは思う。彼女の悲しみと自分の空洞を共に満たすという未知の衝動に導かれて、今までにないぐらい腕に力を込めて彼女を抱きしめていた。

嬉しい、とかすれた女の声が耳に切なく響いた。

優しくして、お願い。最後だけ、もっともつと優しくして……

翌朝、皺の海に埋もれそうになりながらシーツの中で目を覚ますと、身支度を整えた詩織が鞆に荷物を詰め込んでいるところだった。SYOUの視線に気づくと、どこかばつが悪そうに微笑みながら声をかけた。

「おこしちゃった？ まだ寝てていいのに」

「……………」

一瞬置いてタベから今までのことを一気に思い起こし、SYOUはただ、ああ、うん、……と間抜けな声を出した。

「寝顔が綺麗で見とれてたの。口をきくと、また未練が生まれそうだから、黙っていいこうと思ってた」

「私物とか、整理は済んだの？」SYOUは寝起きのかすれ声で尋ねた。

「ああ、結局服だけ持っていくことにしたわ。あとのものは適当に処分していいね。あ、それから」

詩織は左手でSYOUを指さすと、右手の人差し指で自分の耳をとんとんしてみせた。

「お別れにもらったわ」

「何を？」

「慰謝料替わり。本当は別れなくなかったのよ、わかるでしょ。でも未練は残さないで置いてあげる。いただいたものは、恋愛不感症のあなたへの罰」

SYOUははつと自分の耳に手をやった。

……ピアス！

「おい！」

思わず大声が出ていた。

「おお、怖い。お隣の人が起きちゃうわよ」

「……ふざけるな。返せよ！」

久しく出したことのない低い声だった。語尾が震えているのが自分でもわかる。

「たかがダイヤのピアスでしょ。一年分の慰謝料と思えば安いものじゃない」

「そういう問題じゃない」

「じゃあどういう問題なの」

「あれはただのピアスじゃないんだ。金に代えられない唯一無二の思いの品なんだ。マジで冗談じゃすまない。とにかく返してくれ」「よっぽど大事な女からもらったのね。じゃあ名前言ってくれたら返すわ」

「交換条件どころじゃない、ほんとに返せ。返してくれ、頼むから。女なんかじゃないんだ、あれは俺の……」

「あなたの、なに？」

「……蓋なんだよ」

「なによ、それ。蓋がなくなると何が出て来るの、その中から」「詩織！」

SYOUの怒鳴り声に、詩織はつんと顎を上げた。

「そんな大声で脅したって返してあげない。何よ、昨日は天上の恋人みたいに扱ってくれたのに、たかがピアスで気がふれたような顔しちゃって。そうね、また会ってくれたら、その時は考えてあげる



わ。でも、それ以上脅しつけるなら捨てちゃうからね。いつでも電話しようだい。じゃ、さよなら」

SYOUはベッドサイドのガウンを乱暴に羽織ると、背を向けた詩織の手を乱暴に掴み、そのまま後ろに引き倒した。詩織は仰向けにベッドに倒れて、悲鳴を上げた。その耳に、ピアスはなかった。

「ピアスはどこだ！」

狂気のような表情のSYOUに長い髪をわしづかみにされたまま、詩織はもがいた。

「痛い痛い、手を離して！人を呼ぶわよ！」

「言わないでこの部屋から出られると思ってるのか。ふざけるな。言え！」

男の豹変に、詩織の目も座り、冷たい光と涙をみなぎらせて怒鳴り返した。

「SYOUのバカ！ 大っ嫌い。何よ、結局わたしなんてあなたにとってはピアス以下のゴミ屑なんじゃない。いつも思ってた、あなたの目はきれいだけど底なしに冷たい、生粋の人でなしの目だわ。わたしがよく知ってるヤクザの目よ。」

知らんぷりして言わないであげたのに、あなたの秘密。わたし知ってるのよ、名前を変えて隠してるあなたの過去。言ってあげましようか。

SYOU、本名、柚木晶太。

たった十四で、母親と共謀して実の父親を殺した……」

「黙れ！」

ふわりと全身が熱に包まれ、すべてが現実感を失った。

## ツアラトストラはかく語りき

哲夫が現場に着いたとき、すでに救急車が到着していた。

ああ、……やってくれた。呼んじまったか。

それが白い車を見たときの彼の本音だった。

SYOUから電話があつたのは朝の六時半だった。

どうしよう、……気がついたら彼女が倒れていて意識がない。

彼女って、詩織さんか？ お前、なにをやった？

……わからない、蓋が、蓋が取れたから。

おい、蓋ってなんだ。大丈夫か。聞いているか、SYOU？

薬でもやっているのかと疑いながら、とにかく自分が行くまで応急処置をしている、とりあえず自分の車で病院まで送る、とだけ言つて車に飛び乗った。外にはれるような騒ぎにする前に何とか抑える、それが優先順位の一番だったのだ。

室内には倒れた鉢植え、割れた花瓶やシェードランプが散乱しており、ベッドの上には蒼白な顔のSYOUと、その膝に抱かれてぐったりしている伊藤詩織の姿があつた。顔面は血まみれで、小さな呻き声を上げながら右手をふらふらと動かしている。SYOUはまだ混乱しているようで救急隊員の質問にもうまく答えられず、ただ助けてください、を繰り返していた。

とにもかくにも、生きている。それを確認して、哲夫はひとまず安堵した。

マンションの部屋は芸名で借りてはいなかったので、SYOUの住まいと知る住人はあまりおらず、それほど野次馬も集まらないうちに、彼女は病院に運ばれた。社長の指示でSYOU自身は救急車には乗せず、哲夫が同行した。

打撲傷、頬の軽微骨折、脳震盪に鼻血、一時的な貧血。診断の結果は、見かけの深刻さに比べればましなほうだった。倒れたとき頭を強打したようなので、念のためCTスキャンをとることになった。

警察は来なかった、マスコミに情報も洩れなかった。というより、被害者の父親である権田組組長が止めたのだ。

その日中に父親の代理人から連絡があった。

被害届は出さない。不肖の娘がアイドルに血道をあげて、痴話喧嘩のあげくに殴打されて入院したなどと、世間に知られれば恥をかくのはこちらだ。彼女の仕事にも支障が出る。見舞いにも謝罪にも来るな。

そちらにはそれなりのペナルティは負ってもらう。ライブ活動は今回で打ち止め。だがこの事件を隠してきちんと最後までやること娘と縁を切り、入院費、治療費、仕事のキャンセル分、慰謝料は払ってもらう。そして、あとの話は別の場所です……

マンションと病院と事務所を飛び回っているうちに、哲夫の一日は暮れた。

「いつかこういう時が来ると思ってたはいたが、……」

ため息交じりにそういうと、関岡社長は黙り込んだ。

深夜の事務所の応接ソファで哲夫と並んで、SYOUはただ俯いていた。ぼさぼさの茶髪にトムフォードの薄いブラウンのサンングラスをかけた、「やつれ派手」とSYOUが呼ぶ社長の容貌は、いつも若く見える彼にしては五十代という年齢相応に見えた。

「ピースとやらが、そんなに大事だったのか。伊藤詩織がだれなのか分かった上でのこの所業か。おまえ、事務所ごと潰す気か」

「すみません」

全く無表情な声でSYOUは言った。長い沈黙がそれに続いた。窓の外は風俗店のネオンと駐車場の灯り以外は消えて、夜の街のにぎわいも静まっている。

「……今は特に、暴力団とどんな形にしろかわかったことが表に出るとまずい。あちらがことを荒立てるのを避けたがつているのは不幸中の幸いだ。非は一方的にお前にあるし、お前の過去がらみであちらが強気に出てくるのは間違いない。まあ起きたことは仕方ない目の前にはとりあえず最後のライブという仕事がある、それを大事にしろ。……気分を落とすな。できればだが……」

いったん言葉を切ると、社長は声を落としてつづけた。

「お前にこういう傾向があるというのは、知らなかったわけじゃない。そこを抑えられていたから、ここまで来れた。正直、今回は失望した。この先もこの世界で生きるなら、その性分を何とかしろ。ことが表沙汰になって一番傷つくのは、お前を信じてついてきたファンだ。わかるか？」

「……本当に、申し訳ありませんでした……」

ゆつくりと、膝につくかと思うぐらい深く、S Y O Uは頭を下げた。

二人で応接室を出ると、S Y O Uは老人のようにゆらりゆらりと不安定に歩き、廊下の突き当りまで行って立ち止まった。そしてそのまま壁に体をもたせかけるようにした。

「おい、大丈夫か」

思わず肩に手をかける。返事はなかった。エレベーター前の空間で、S Y O Uは小窓の向こうの光の少ない夜景を見ていた。横に並んで外に視線を投げながら、哲夫は静かに語りかけた。

「お前さ、昔から結構アナキーだったよな」

「……………」

「ライブ会場でノリに任せて服脱ぎ始めて全裸に近いとこまでいたり、生放送で歌詞改造してとんでもない単語連発したり。お前の手をつかんで袖口まで引きずったのもマイク止めたのもみんな俺だ。街中で酔っ払いに、連れてた女の子ことからかわれていきなり殴り倒したのもあったな」

背後から、S Y O Uが眺めているガラス窓に手をつく。

「それからあれだ、お前の叔母さんとかいうのが楽屋口に来てファンと小競り合いになって、どきなよおばんとか怒鳴られてた時、お前出てきてファンの……」

「もついいよ」S Y O Uは小さな声でその先を押しとどめた。

「お前をここまで飼いなすのはなかなか大変だったんだぞ。社長の落胆は仕方ない。だが今回は俺はお前に頭が上らない気分だ。

お前、自分の判断で救急車呼んだんだよな」

「……………」

「俺はあのととき、あきらかに詩織さんの状態よりお前のこれからを優先してた。だから救急車を呼べと言えなかった。

彼女が気絶しているだけなら、部屋に駆け付けて金を渡して示談にして、と

かそんな都合のいい可能性に賭けたんだ。

「……………」こういう仕事してると、こんな人でなしな判断しかできなくなるんだな」

「俺じゃなくて、ツアラストラが呼んだんだ」

「なんだって？」

窓のほうを見たまま、S Y O Uは歌うように言った。

「“おお、わたしの兄弟たちよ。あなたがたは豪胆であるか？目撃者のあるところの勇気ではなく、もはや見ている神もない孤高の勇気、驚の勇気をもっているか？」

冷たい心、驢馬、盲者、酔いどれを、わたしは豪胆と呼ぶことはできぬ。豪胆なのは、恐怖を知りながら、恐怖を屈服する者だ”」

哲夫は呆れたような顔をして聞いていたが、やがて口を開いた。

「……なるほど、俺より前にそいつに電話してたのか」

「そうだよ」

「なかなかいいことを言うやつだな。あとでツアラストラにお礼しよう」

S Y O Uは哲夫に、少しほどけた表情を向けた。

「……ときどきさ。自分が、狸御殿に住んでるような気分になるんだ」

「狸御殿？」

「花束を手にしたと思ったら、翌日には塵屑になってる。ああ化かされたな、と思う。美女だと思っても、みんな狸。そんな気分」

哲夫は思わず苦笑した。

「で、どんな花だったんだ、今回は」

「手にしたというか、最後に渡したつもりだった」

……もういいや。身の程知らずなのはこっちだったんだ」

薄暗い廊下の灯りの下の、鋭角的な横顔を見ながら、哲夫はその背をぽんと叩いた。

「それでも、たまには狸じゃない女もいるだろう。見つけ出せよ、ニーチェの驚の勇氣について話し合える相手とかさ」

コーヒーでも買つて来るよ、と背を向けた哲夫を眺めながら、S  
YOUの頭の中には、以前、その言葉を書き送ってくれた女性が付  
け加えた手紙の一節が踊っていた。

何かあつたら、思い出して。

何があつても、逃げないで。

いちど逃げたものからは、一生逃げ続けなければならぬのが人  
生よ。

晶太、離れても、わたしはここにいます。いつでも、あなたを見て  
いるわ……

## ツアラトストラはかく語りき（後書き）

今更になりますが、途中から入っていらつしやる方もいるかと思ひ補足しておきます。

この作品は、前作「墨といちじく」の続編です。逆に言えば墨といちじくは主人公の少年時代のものがたりです。

この連載そのものは前作を見なくても分かるように独立したつくりにしていきますが、合わせて読んでいただけるとこの話の背景も立体的に分かりやすくなるかと思ひます。

興味があつたら、覗いてみてくださると嬉しいですよ。

## ピンク・ホーネット

権田組組長、権田眞一郎に直々に呼びだされたのは、とある会員制クラブの個室だった。

高級クラブが立ち並ぶ銀座のN通りに位置するビルの最上階、会員以外を寄せ付けない黒光りする分厚いドアに、クラブ・ホーネットと印字された銅板がはめ込まれていた。店名の脇に、スズメバチの小さなイラストが掘りこんである。

そのセキュリティ チェックは異常に厳しく、SYOUとマネジヤの哲夫と社長たち一行も、個室に入る前に、全身を棒状の金属探知機でチェックされた。ピンストライプの細身の黒服を着たボーイとイブニングドレスの美女が、きらびやかなシャンデリアの下で静かに行きかっている。だが、高級な革張りのボックス席にかしまって座る三人には、豪奢な牢獄のようにしか思えなかった。

遅れて到着した権田眞一郎は、四十前後の肉付きのいい宝飾品だらけの女とボディガードを従え、店内の全員に深いお辞儀で迎えられた。組長が濃紺のゼニアのスーツに包んだ巨体をSYOUたちの向かい側のソファに沈めると、入室と同時に立ち上がった関岡社長はSYOUと哲夫とともに頭を下げて切り出した。

「申し訳ございません、このたびは誠に」

「お前はいい。おい若造、顔」

はつと顔を上げたSYOUの切れ長の目の上に、深くまの染みついた落ち窪んだ目が据えられていた。

鋭い眼光に射すくめられたまま、永遠とも思える沈黙の時が過ぎる。頭を下げたままの哲夫の首筋を冷や汗が流れ落ちた。

「阿呆と美男は使いよう」

一時が経ち、ようやくと組長は口を開いた。

「若いもんの情報に疎いこの私でもお前さんの名と顔はよく知って



いる。なるほどこうして見ると作り物みたいな美男だな。あのバカ娘も悪いのに引っかけたもんだ。今いくつだ」

「二十二です」組長の視線を静かに受け止めたまま、S Y O Uは答えた。

「突っ立つてないで座れ」

三人そろって人形のように腰を下ろした。

「歌手でデビューしたんだっとな、だがこの顔なら役者かホストのほうに向いとるだろう。たらしこむのだけが特技なら。どうだ関岡とやら」

「……は、それは、お陰様で役者業のほうもいたた、いただいておりますが」

急に話を向けられて、隣の社長がどもりながら答えた。

「何やらあんたの歌はでたらめでよくわからん。あんなものでどういう経緯でデビューしてここまでできたのだったかね。わかるように手短に説明してくれ、社長」

葉巻を取り出しながら自分のほうを見もせず女に火をつけさせる組長に、社長はしどろもどろで語り始めた。

きっかけは学園祭だった。

名門で知られる国立大学のキャンパスの屋外ステージで、意味不明の歌詞を喚き散らして拍手喝さいを浴びていたS Y O Uたちのバンドに、講堂でトークショウを終えて出てきた芸人が客席から絡み始めた。

「おい下手くそ。何言っとるか通訳が必要や。足こぎボートのハクチヨウが暴走して花見客虐殺で、そういう歌でええんか」

「最後に大空にはばたくんだから、虐殺じゃなくて昇天てこっちゃ」  
S Y O Uは笑いながら口調を合わせて答えた。

「なんて歌や」

「はばたけぼくらはくちようごう」

「あほか。お前頭おかしいやろ。よし、俺も歌詞付け足して歌うた

るわ」

ちょうどテレビ局が入っていたこともあり、二人で即席の下ネタを混ぜ込みながらやんやの拍手を浴びた滅茶苦茶なデュエットは全国に放映された。芸人よりも多くの嬌声を集めていた見栄えのいいヴォーカルに、一斉に視聴者が反応した。その中に、立ち上げて十年目の芸能事務所がやつと軌道に乗り始めた関岡がいた。親元を離れて自活していたS Y O Uは、金になるならと事務所への誘いに応じた。

現役T大生ということもあり、彼の名前と顔はすぐに売れた。即席バンドは自然解体し、S Y O Uだけが唐突に芸能界の光を浴び始めた。

女子供が喜ぶような内容でもない、荒廃したグロテスクな歌詞にもかかわらず、彼の絶叫系の妙な歌い方は、その飛びぬけた容姿とのミスマッチが受けて一種のコミックソングのように受け入れられてしまった。バラエティ番組からドラマのゲスト、そして主役へ、気が付いたら彼は大学を中退し、知らない世界の中枢に横道から入り込んでしまったのだ。

ひととおり聞き終わると、権田は葉巻を唇から話して紫煙を吐いた。

「そのレベルの大学に入れる頭をしていながら、ピアスごときで無抵抗の女を血だるまにする。素人さん相手に無駄な暴力をふるうような阿呆はうちの組でも使えん最低の屑だ」

S Y O Uは長い睫毛を伏せて唇を引き結んだ。

「あんたの気がおかしいわけじゃないというなら、その飾りもんがそれほど大事なわけを、気の毒な女への伝言として説明する義務があるだろう」

場は沈黙に包まれた。すべての視線が、S Y O Uに注がれた。

「あれは、……猫です」

絞り出すような声で、S Y O Uはぼつりと言った。

「猫？」

「僕が十二のころ両親は別居しました。僕はそれから二年母と九州に住んでいたんですけど、その母が昔の男と家出して、身寄りがなくなつて十四の時叔母に預けられました。その叔母が飼っていた猫です。」

その前に引き取つてくれた親戚の家からは追いだされていたし、次はどこへ行くことになるのか、とても不安な毎日でした。僕にとっても懐いてくれて、あのころ、あいつがいることで頑張れた」

妙な顔をしている組長の横で、連れの女が口を開いた。

「その猫は、……死んだのね？」

S Y O Uは女を見ると静かに視線を落とした。

「僕がドアをあけっぱなしにしたせいで、僕を追つて外に出て、車に轢かれました。」

叔母に頼んで骨を取つておいてもらつて、独り立ちできるようになつたら、ダイヤに加工して身に着けようと決めていました。ずっと一緒にいたかった。お守りがほしかった。そうしないと、まともに生きられる自信がなかった」

「なるほど、それであんな変な歌でデビューを急いだのか。」

悪いがピアスは紛失したそう。もうあきらめた方がいいな」

「……」

体の奥から寒気を伴つた震えが上がってきて、泡のように脳内で弾けた。

一瞬で涙に変わりそうなそれを、S Y O Uは齒を食いしばつて必死でとどめた。

「その、母親を連れ出した男というのが、当時あんたが手にかけてた筋もんか」

「組長、どうかそのことは、ここでは……」

関岡社長が青い顔をして割つて入った。

「別にかまわんだらう。あいつは俺の系列の組の薬を横流しして、金庫の金を持ち逃げした糞野郎だ、殺されて当然だ。あんたの母親を手に入れる前に女を一人刺してる。あんたの母親も一緒に家出と

いうより金づるとして拉致されていたという話だし、警察と組から手配がかかってどちらにしろ先はなかった」

「……殺していません」

押しつぶしたような声でSYOUは一言言った。

「ああ、逃亡しようとしているやつらの車のフロントガラスを割って阻止、お前がボンネットに飛び乗って母親が男を撃って結果的に、だったか、まあ共同作業だな。十四にしてはよくやった」

「……」

「だが奴は見てくれだけはいいい男だった。どういうわけか今のお前さんそっくりの顔だな」

「もうやめておあげなさいよ」

隣の女がやんわりと組長を制止し、SYOUに笑いかけた。

「この子はそこら辺の塵屑イケメンとは違うわ。その傷のぶんだけ、女の心臓を、直に虜にできる子よ」

その笑顔は何か別のものが裏側から貼りついているようで、美しいナメクジが女に化けたらこうなるかというようなぬめぬめした女だと、SYOUは思った。

「さて。それ程の資質をお持ちならこれからは活躍してもらおうか。あんたみたいなどうせ使い捨ての芸能人の価値は、女どもの脳味噌をでなく、子宮をどれだけつかめるかが命だからな。」

過去はきれいに清算して、今も2、3社とCM契約しているようだが、どんな仕事を増やすといい。あんたは歌手というより役者向きだろう。私が手を回せばいくつかの企業が声をかけてくる、旬を逃さず片っ端から受けときなさい」

「は……？」

妙な展開にSYOUは戸惑った。

こういう筋の口利きでスポンサーが乗るという話はこのご時世では現実的ではない。第一、好意でこんな申し出をする理由はあちらにはないはずだ。隣で社長がじつとりと湧き出る額の汗を拭きながら頭を下げててもごもご言っていた。

テーブルの下では澪子がすでに裸足になった足を延ばし、SYOUのオペラパンプスの靴を脱がせにかかっている。困惑しながら顔を上げると、蜜柑が丸ごと食べそうな唇の両はじをくつと上げながら、足の先をそろそろと股間に近づけてきた。

SYOUは小娘のように下を向いて膝の上の握り拳に力を入れた。

……どうしろというんだ。

「新たな門出を祝って乾杯といこう」

個室のドアが開く音がした。

カチカチと音がして、シャンパンとフルートグラスを乗せたトレイが運ばれてきた。澪子はSYOUの股間からそつとつま先を降ろした。

銀のトレイを持つのは、どう見ても十八よりは下に見える少女だ。長い黒髪をそのまま後ろに流し、耳の上に牡丹をかたどった花飾りをつけている。身に着けている桜色のチャイナドレスの、豊かな胸の隆起の下を流れ落ちるようなほつそりとしたラインは、まるでそれ自体がシャンパンのフルートグラスのようだった。

伏し目がちの瞳はさやさやとした細い睫に縁どられ、つんとした鼻梁と花の様な唇のバランスがいとおしくなるほど美しい。これまで見た女性の中で一番きれいな子かもしれないと、SYOUは感嘆した。

「リン、彼が誰だか知っているだろう」

リンと呼ばれた少女は、そつと瞳を上げてSYOUを見ると、はい、と小さく答えて視線を落とした。

少女は細い蠟細工のような手でSYOUのフルートグラスにシャンパンを注いだ。小刻みに指が震え、液体がグラスから一筋こぼれた時点で少女はいったんボトルの口を上げた。

「失礼をいたしました、すみません」

「いや、……大丈夫」

笑顔を浮かべて少女を見守る澪子のほうからは、何かお香に似た香水の芳香が漂ってきていた。

「この子は日本人じゃない。台湾出身だ。日本語がうまいだろう。ある男に会いたくて、それだけのために勉強して、そして親も何もかも捨てて日本へ来た。けなげな子だ」

「……すごいですね、若いのに。恋人か誰かに会いに、ですか」

権田は答えずに含み笑いをした。

ふと見ると、頬を上気させた少女の、アーモンド形の目にはうっすらと涙が浮かんでいた。シャパンを注ぎ終わった少女はひとつお辞儀をすると、そのまま下がっていった。細い後姿をねっとりから見ながら権田は言った。

「かわいいだろう、こんな子がこういうクラブで海千山千にまじって働いとる。私の一番贔屓だ」

そこまで言うと、顎を上げてソファに座りなおした。

「さて、あんたに頼みたいことがある。聞いてくれるかな」

「……はい」これからが本題だ。SYOUは姿勢を改めた。

「ちよいと最近このお姉さんが退屈しているようなのでな、話し相手になってやってもらいたいんだが。まあ君の母親に近い歳だろうからなじみのない年齢でもあるまい」

「失礼な人ね、まだそこまでいつてないわ」

あるかなしかの薄い眉をひそめて女は笑った。

「私はこう見えても情深いタイプなんだが、あいにく体のほうが言うことをきいてくれんな。大事な女たちに愛想を尽かされても困る。こいつはいい女なんだが中でも一番欲が深くて手を焼いとる、ひとつ楽しませてやってくれ。好みに合わない寝首をかかれることがあるがな」

「悪かったわね。でも、あなたのそばにいて一番幸福を実感した夜だわ、きょうは」

「まだそれを言うのは早かろう」

SYOUは心の中で大きなため息をついた。女はそっとテーブルの上に手を出すと、馬鹿でかいサファイアの指輪をはめた指でSYOUの手を上から撫でた。

「女冥利に尽きるわ、夢のようよ。でもあなたのほうはそうでもないでしょう。だから私からもお返しにプレゼントをあげるわ。花園への招待状よ」

「花園？」

「私が味わった極上の蜜を、ぜひあなたにも味わってほしいの。同じ幸せを分かち合いたいだよ」

権田が後を続けた。

「誰もが行けるわけじゃない。うわさは耳にすることはあっても入口のわからない、限られたものだけに開かれる、垂涎の禁断の花園だ。そこへのパスポートをやるう。彼女の招待は私の招待でもある。これについてはそちらに拒否権はない」

「……」

「ライブの最終日の翌日、あんたはこの女のところへ行く、そのあと、花園へ行く。ある者にとっては天国、ある者にとっては地獄」

そういうと、権田は俯きがちな社長のほうを見ながら、ゆつたりとシャンパンを口にした。S Y O Uは薄桃色に泡立つグラスに口をつける、テーブルに置いて口を開いた。

「ひとこと、申し上げていいですか」

……今回ぼくがお嬢さんにしたことは、芸能人として以前に人間として最低の行為だったと思っています。そのことについてここで心からお詫びさせていただきます。本当に、申し訳ありませんでした。そう、詩織さんにもお伝えください」

組長は葉巻の灰を落とすと、静かな口調で答えた。

「あのバカ娘も一度こういう目に遭わなければわからんこともあっただろう」

「彼女の怪我は……」

「頬の骨折なら、放置していても治る程度のものだそう。ほかに異常はない。もっともそれで済まないような怪我なら、あんたも無事ではいられなかったがな」

「そうですか……」

S Y O Uは心底ほつとしたような顔を見せた。

「それで、どこへ行けばいいんですか」

「迎えの車に乗れ。花々には香しい蜜が宿る、そして蜜に群れる蜂どもに罪はない。花園の名前を教えよう。ハニー・ガーデンだ。私の口から言うのはいいが、この名は二度とその口から発してはいけない。その薄暗い過去込みで、あんたの命運は私の預かりだ」

……自分という船がどうい波に乗りどこへ行こうとしているのか、十四の時も今も、大してS Y O Uにはわからない。立ち止まるうにも、身の回りの波がいつも激しすぎるのだ。

だが生きぬいて見せる。そうするしかない。たとえ蓋が外れても、嵐の海でも、この身一つで歩いていかなばならない毎日、昔も今も同じなのだから。

運命が自分に望もうと、どんなに心に毒がたまろうと、絶対に地面だけを見て歩きはしない。喪失の痛みの中で、それだけをS Y O Uは心に誓った。

東京最終日のライブは、歌手としての彼への決別を惜しむファン  
の大声援に包まれて、大盛況で終わった。



背中を撫でてください

ナメクジ女、栗原湊子宅からSYOUが解放されたのは昼過ぎだった。

あちら差し回しの車の、頬に鋭い傷跡のある若い運転手は、SYOUを乗せる時に発したどうぞ、という単語以外何もまだ話していない。尖った顎と鼻、切れ長の鋭い目は、日本人ではないらしいがどこの国かもわからない、異邦の香りを漂わせていた。

全身に、痛みと不快感を伴った疲れをからみつかせたまま、SYOUは今日の午前中までの異様としか言えない記憶をぼんやりと反芻していた。

「生きてる？ ごめんなさいね、こんな目に遭わせて」

突っ伏したまま髪の毛をつかまれて乱暴に横を向かせられると、クラブ・ホーネットで見たときよりもずっと酷薄な目つきの湊子の顔があった。

「わたし若いころ、けっこう顔のいい男にレイプされたのね。実をいうと、それから見てくれがいい順に若い男はダメなのよ。じじいならまあいいんだけどね。でもあなたみたいな子が完全に理性を失う表情を見るのは大好き。本当に、いたいけでかわいかったわ」

解放されたばかりの縄目の鮮やかに残る手首を指でなぞり、髪の毛が貼りついたままの頬にそつと唇をつけると、髪を撫でながら女は満足そうに笑った。

「何か感想があったら聞かせてくれないかしら」  
小さく息を吐くと、SYOUは言った。

「傷は……」

「え？」

「少しは、これで、癒えましたか」

「……………」

いきなり背中をつつかれたかのような表情をして、澪子は黙った。

「……少しだけ、眠らせて」

そのままずっと瞼を閉じ、汗で冷えたシーツに頬を落として、夢もない暗黒色の世界に落ちて行った。

「会話をしちやいけないのかな」

静かな走行音の響く車内で、気を紛らわそうとSYOUは傷の男にやんわりと聞いてみた。

「これからのことは、お部屋にいたらご説明します」

きれいな発音だが、やはり生粋の日本人ではないと思われるなまりがあつた。

「……説明か。もう、生きて帰れば何でもいいよ」

「ご気分が悪そうですね」

車窓の風景の流れが完全な二次元に見えて、眩暈とともに気が遠くなるような心地がする。こんなとき、ふと思いつくのはシャラの手触りだ。あいつのそばで丸くなって毛布を頭から被れば、どんなことがあってもいつでもその空間は優しくかった。自分の呼吸と重なる猫のかすかな呼吸。いつでも胸に当てられていた小さな手。名もない、ささやかな楽園。もう、どこにもない。

「……鴨長明とおっさんは、なかなかいいこといつてるよね」

前に視線を戻して、SYOUは唐突に口を開いた。

「は？」

「朝に死に、夕べに生まるるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。」

この世は負け犬の死屍累々だ。とりあえず、朝があつて夜があつてまた朝を迎えられることに感謝」

ミラーのなかの表情のない顔が、ふつと薄く笑った。

豪華なマンションの地下駐車場に、車は静かに降りて行った。高級外車の多いそのパーキングには広いエレベーターがあり、珍しいカードキー形式だった。最上階まではこれでないといけないらしい。

ホテル以外にこんな機能があるマンションは初めて見た。

どうにでもなれという投げやりな気分と、これからさらに何を見て知ることになるのか、という他人事のような好奇心が、SYOUの中の痺れて痛覚のなくなった部分を裏側から刺激していた。

十階でエレベーターを降りると、なかばペントハウスのようになっているらしいその部屋ひとつしか、その階にはないようだった。あとははめころしガラスの向こうに見える、花に埋もれた広い屋上庭園がその階の半分を占めている。

天井まで届くポリツシユシルバーのドアの脇の呼び鈴を押すと、中からメイドのような風情の女性が出た。男は中国語で何か尋ね、女が早口で答える。続く会話はSYOUには当然なにもわからない。ただ、ここは異空間なのだという印象が、その異国の言葉の応酬の中でさらに膨らんでいった。

応接室に通されたSYOUに蓋つきの茶器を出すと、女は頭を下げて姿を消した。蓋を開けると、水中花のように華麗な赤い花が、透明な湯の中にゆらゆらと花開いていた。

向かいに座った黒ずくめの傷の男は、青白い無表情で語りかけてきた。

「あなたを通す部屋には女性がいます。あなたを接待するのが彼女の義務です。果たせなければ彼女が罰されます。相手がだれか彼女にはわからないようになっていきます、そのための目隠しと耳栓です。外す外さないはあなたの自由ですが、それをすればあなたの身元が外にどういう形でも責任は負えません。今の仕事とキャリアを失う可能性をお考えください。それでよければお好きにどうぞ。怪我をさせないなら何をしてかまいません。なお、あなたにはここで起きたことに関する絶対の守秘義務があります、それはあなたの命にかかわることと心得てください。何かご質問は」

「……」

SYOUはゆっくりと、畳みかけられたことの内容を反芻した。そして、言った。

「つまり、やることはやれと。できなければ罰は彼女にいくと。こっちは一向に構わないんだけどそれでいいの」

「彼女がそれでいいと諦めるなら無事に部屋を出られるでしょう」

「……」

「今日一日、彼女はあなたのものです。寝室にお飲み物をお届けしますが、何がよろしいですか。ソフトドリンクもアルコールもあります」

「じゃあ、ドライ・マティーニ。ボンベイ・サファイア・ジンで、フランクリンスタイルで」

「かしこまりました」

……かしこまりましたときた。本当にわかってて答えてるんだろ  
うか。

広いバスルームでさつとシャワーを浴びたのち、用意されたバスローブに身を包んで、鏡を見る。口元が痣に染まった疲れた顔。体のあちこちも微妙にいろんな色になっていることだろう。

……果たせなければ彼女が罰される？

手が込んでいる上に変態じみたいやがらせだ。俺のプライドをずたずたにしたのちに花園に放り込んで、それで今度は使い物にならなければ女を罰すると。……勝手にすればいい、罰されるのがこっちじゃないならどうでもいい。あの変態おばはんは俺の醜態を眺めることで十分満足していた、ここで俺がなにをしようとしなかつともう大して興味もないだろう。

ドアを開けると、まずバラの香りが鼻孔を占領した。そして、白階段型の織り上げ天井も壁も、白。レースのカーテン越しに午後の日差しが部屋をほんのりと満たす。隅の花台に、白を基調としたフラワーアレンジメントが置かれている。白バラ、スプレーマム、ヒムロスギの取り合わせの、清楚なスタイル。ベッドサイドの白いテーブルにはドライ・マティーニがひとつ置かれている。二つ沈んだオリーブを確認して、注文通りフランクリンなのに少し感動する。

(\*)

ベッドの中央は人型に膨らみ、枕には黒髪が広がっている。顔は見えない。

近づいて、額から上を眺めたのち、そう、会話はできないのだと思いついてから、SYOUはそつと薄い掛け布団をめぐつた。そして、驚愕した。

……この子は。

まるでエジプトのミイラのように、両手で胸を抱くようにして、長い黒髪の少女が、薄桃色のシルクのナイトドレスを身に着けて横たわっていた。

黒い枇杷度の目隠しをされ、その唇は閉じられていたが、ひと目見ただけで昨日のフルートグラスの少女だとSYOUにはわかった。その体の緩やかな起伏も鼻梁から顎にかけてのうつくしい稜線もまるで堀り起こされたばかりの女神像のように神々しい。SYOUはしばらくつくづくとその全身を、なにかの作品のように眺めたのち、ただ思った。

会話がしたい。触れるより会話がしたい。きっと彼女もそうだろう。この全身が、そういつている、そんな気がする。

でも、それは許されないのだ。

ベッドのふちに座り、手を伸ばす。少女の頬に触れてみる。

びっくりと指の下で反応があり、さざ波のような衝撃が少女の内側に広がるのがわかる。

それから、唇。和らかに優しい、小さな枕のような感触。幽かに口元が開いて、指の行く先を追う気配を見せる。そのままゆつくりと指先で、唇の上を一周する。上下の唇の間で人差し指が止まると、内側からあらわれた小さな舌がそつと指の腹に触れた。小動物の巣の中の、母を待つ赤子のように。

髪を撫でてみる。指を開いて、その絹糸のような感触を五本の指に存分に味あわせる。かすかに開いた少女の唇から、音にもならない幽かなため息が漏れる。胸の上に重ねられた少女の指を握る。指先をずらし、隆起した胸の突端に触れてみる。あ、ため息とも喘ぎ声ともつかない小さな音が漏れ、少女の膝がかすかに上がる。二つのふくらみが、荒くなつた呼吸とともに緩慢に上下し始める。

SYOUは手を離し、額に手を当ててしばらく考える風にした。そして決心したように唇を引き結ぶと、いきなり手を降ろして彼女の耳栓を外した。どこから見られているかもわからないので、シーツに隠し、わからないように。

少女は驚いたように身じろぎし、耳に手をやった。SYOUは耳元に口を寄せて、小声でささやいた。

「……正直に言おう。僕はやっぱりこれ以上何もしたくないんだ」  
少女はこちらに顔を向けると、驚いたように唇をかすかに開いた。「好きでここに来たわけじゃない。別の出会い方をしていたらそれは違ったかもしれないけれど、こんなところでこういうかたちできみたいな子と関係を持ったら、ひととして一生立ち直れない気がする。でも、何もしないと、きみは罰されるんだろ。それは嫌だ。僕はどうしたらいい」

リンはSYOUのほうに顔を向けたまましばらく黙っていた。  
ゆっくりと手を上げ、白い指を探るように伸ばすと、SYOUの頬に触れた。

そしてそのまま細い腕がゆっくりと、SYOUの首に回された。  
SYOUが手を添えると、リンはしがみつくようにして耳元に口を寄せた。甘い吐息に小さな声が続いた。

「……シヨウ」

「うん」

「あなたなのね」

「うん」

目隠しの下から、少女の頬をすうっと、透明な涙の雫が零れ落ち

た。首に回された手にぎゅっと力が込められた。

「わたし、あなたに、……あいたかった。」

あなたが好きだった。ここで、あなたを待ってた。あいたかった。あえればもう何でもよかった。やっと、この時が来た」

SYOUは驚いて聞き返した。

「あのとき、言っていたのは、じゃあ……」

「わたしも、あなたとなにかしたかったわけではないの。ただ、本当にただ、あなたにふれたかったの。こんなふうに」

SYOUは絶句した。

「きみ、……いくつなんだ。本当に僕に会ったためにここにいるのか。嘘だろう。どうやってこんなところに。だって、この場所は

……」

「……よかった」

「よかった？」

「あなたがそういうひとで、よかった」

「……」

リンの唇の両端が、初めてかすかに上がった。

「わたしは、あなたを思うことだけで、生きてきた。わたしの人生にはほかにない。あの日あなたに会ったあと、涙が止まらなくて困った。生きてきていちばん、嬉しかった。

ここでこんなわたしをみられるのはいやだけど、わたしを拒否するあなたでいてくれて、うれしい。だから、会えてうれしい」

SYOUは沈黙してただ少女の顔を見た。そして口を開いた。

「いまからでも、きみの故郷に帰れないのか」

「もう遅い。わたしにはもう家も家族もない。国籍もない。この世界から出られない」

「え……」

「いいの。わたしは、いいの。ここでいいの。なにもつらくないの」

「いいわけないだろう。僕に会いたくてここに来て、そしてこれで終わりでもいいなら、どうやってきみはこれから生きていくんだ」

しばらく口を閉じて考えたのち、リンは静かにいった。

「きょうの、この瞬間を思うだけで、あとの人生を生きられる」

「……………」

空砲のような衝撃と、

驚きと、かなしみと、そしてそれに続く未知の怒りと嫌悪感が一気にS Y O Uの胸に押し寄せた。

「……………わたしのことは大丈夫。なにもしないでくれて、ありがとう。あなたが幸せでいてくれれば、わたしは幸せ。だから、もう、いい」しばらく考えると、S Y O Uはリンの頬に掌を寄せ、そして拒否する間もなく、いきなりその枇杷度の目隠しをほどいた。

「あ」と小さく声を出すと、リンは顔を覆うようにした。

「今日だけを思っ生きていくなら、ちゃんとこっちを見て」

「だめ、慣れていないの。誰の顔も見なかったから、わたしはここにこうしていられたの」リンは両手で顔を覆いながら言った。

「きみは僕相手に恥ずべきことをするわけじゃないし、僕も同じだ。今日の記憶だけで生きるなら、ちゃんと顔を見て。僕も忘れないから」

顔を覆っている両手を、S Y O Uはそつと握って退けた。あの夜、クラブ・ホーネットで見たときよりも近く、本当に近くに、二人の顔はあった。深い森の奥の泉のような、不思議な煌きを宿す鳶色の瞳。その中に、初めて見る花を覗きこむような、自分の顔があった。……………シヨウ、どうしたの。誰かに殴られたの？」

「大したことじゃない。少し喧嘩しただけ」

リンの細い手がそつとS Y O Uの口元の傷を撫でた。

「あのね。ひとつだけ、おねがいがあるの」

「……………なに？」

鈴のような声を震わせながら、リンは言った。

「じかにわたしを抱きしめて、背中を、撫でてください」

「……………背中を？」

「それが、たったひとつの、夢でした」



SYOUはバスローブから腕を抜くと、たくましい上半身をあらわにした。リンも目を落とし、ずっと夜着から腕を抜いてまっしろな上半身をさらした。豊かな乳房がこぼれ出て揺れた。

ふたりとも、初めて異性の肌を見るローティーンのように、胸の内を震わせながら未知の熱に導かれていた。リンはそつとSYOUの胸に耳をつけると、長い睫に縁どられた瞼を閉じて、うつとりとその鼓動を聞いた。とん、とん、とん、小さな声でリンは嬉しそうにSYOUの鼓動を数えた。

そのすべらかな背中へSYOUはゆっくりと両手を回した。静かに、やさしく、宝物を包むように。そしてふたりで、横になった。

「ああ」

ひとのような、何かの動物の鳴き声のような、風のような、ささやかなため息が彼女ののどから漏れ、そして一度とまっていた涙が、今度は咳を切ったようにほろほろとこぼれつづけた。暖かな大理石のような手触りの背中のカープを撫でながら、何か言おうとしたわけではないのに、SYOUの口から自然に、その言葉は漏れ出ていた。

「……いい子だね」

リンは、驚いたように唇を開くと、細い腕に一層力を込めてそのたくましい体にすがりついた。

「ほんとに、きみは、いい子だね……」

泣くようなリンの声がそれに続いた。

もういちど。おねがい、ショウ、もういちど言って……

隣室でモニター画面をじっと見ていた傷の男は、禁じられた会話と彼女の慟哭を聞きながら、細い指で無意識に自分の唇の上をたどっていた。そして下を向いてしばらく考えたのち、モニターのスイッチを切った。

背中を撫でてください（後書き）

\* フランクリン…… オリーブを二つ入れたドライ・マティーニ

## 落花流水（前書き）

二日に一度のペースで固定しようと思います、これからもよろしく。

> i 3 3 8 9 9 7 — 1 0 9 4 <

## 落花流水

社長からは、一週間の休みが寄越された。

「とにかくひとまずリセットしろ、そして休みが明けたら真っ白な状態になって出てこい」

伝言はそれだけだった。SYOUはありがたく好意を受けとり、食料を買い込むと部屋に閉じこもった。

窓脇のベッドに寝転ぶと、四角く切り取られた空ばかりが深く美しかった。思い出せば、昔自分一人では手に余るほど傷つくと、一人ぼっちの部屋でよくそうやって過ごしていた。飛行機雲、鳥、星に太陽に月、二十四時間をひと区切りとして明から暗へ、暗から明へ、自在に移り変わる窓枠の中のキャンバス。

「仰せに従って彼女の耳栓を取って会話した。ほかの客の情報とか余計なことは聞いてない。自分の不利をいとわないなら自由だと君は言ったよね」

「その通りです」

ハニー・ガーデンでの傷の男との会話が、留守電の再生のように耳元に蘇ってくる。

「じゃあこのことで彼女にペナルティが科せられるようなことは…」

…」

「ありません。重要なのはここでの出来事に関するあなたの守秘義務のほうです」

「彼女はここから出られないのか。同じ境遇のほかの女性たちと同様に？」

「お分かりだと思いますが、そういうご質問には答えられません」

SYOUは表情の読めない、背の高い蒼白な男の顔を見つめた。

「彼女を憐れと思いますか」

逆に質問されて、SYOUはとまどった。言えることはひとつだ

けだった。

「ここにるのが僕のせいだというなら、……ただ、残念だ」

男は口元を少し緩めると、言った。

「あなたはまたおいでになる」

「なぜそう言える」

「彼女を抱いて、二度来なかったお客はいません」

SYOUは顔を上げて、まじまじと男の顔を見た。

「申し遅れました、私はヤオ・シャンと申します。彼女を憐れに思いになるなら、どうぞ、また当ガーデンにお越しください。なんの慰めもない人生に、あなたの存在だけが光になるでしょう。お次の機会には、リングが手塩にかけた空中庭園のお花も御覧に入れましょう。あなたが心から彼女を思ってくださいれば、もしかしたら彼女の運命も変わるかもしれません」

謎のような言葉を繰り返し辿り、自分の鼓動のみを聞いているうち、体と体を起動させる脳味噌がすべての労働を拒否し始めた。何も考えたくない、忘れたい、ただ眠りたい。いつが始めとも終わりとつかない、散漫な眠りと覚醒。その繰り返しにゆっくりと全身が引き込まれてゆく。

悪夢は間断なく訪れた。

刺激には耐性があるほうだと自覚していた自分の心身にも、さすがに限度があったらしい。生々しい感触、破壊された感情、永遠とも思える時間の間ひしやげていた自分自身、繰り返す痙攣と陽物と強制的なエクスタシーのイメージ、それはそのまま遠い過去の、同じ感覚の記憶へと数珠のようにつながってゆく。

こんなことぐらいで自分は変わらない、こんなことぐらいで。呪文のような言葉は自分の中に刻印されたものだった。そこに、あの声が響いてくる。

SYOU、ゆずきしようた。

たった十四で、母親と共謀して実の父親を殺した……

言われてみればその通りなのに、あとき、聞いてびっくりしている自分自身にびっくりしていた。

……こんなことも自覚せずに、自分はのうのうと生きてきたのか。事実、言われてみればその通り、自分は母親と共謀して父親を殺したのだ。そしてその父親も、良心のかけらもない人殺しだった。

だがどうすればこの宿命から逃れ出ることができたのだろう。明るい日差しの中で多くの人に囲まれているとなおさらに、薄い舞台装置を倒せばその向こうでぱっくりと口を開ける闇の気配をいつも感じていた。行き場はない。昔も今も。あさい夢の中で目を閉じて、この舞台からの出口を探す。

そのうち、あたまの中をひやひやとした何かが流れだした。その感覚の中に身を沈めていると、いつしか自分の体は丸ごと、その無音の流れの中にあつた。

うすあおい、サファイア・ブルーの水が眼前を満たし、自分が見上げているのが水面だと知る。その水面に、どこから降って来る、フランジパニに似た花がうすもいゝの影を作る。ぼたり、ぼたり、ぼたり。ああ、自分は川の中を流れているのだ、と思う。

その画面の中に、やがてすうつと人影がさす。こちらに顔を向けて、目を閉じた全裸の髪の長い少女が、うつぶせで流れてくる。

……リン。

細い腕は流れに揺蕩い、ふわりふわりとこちらに延ばされている。蠟人形のような顔の周りを長い髪が生き物のように渦巻く。しばらく向き合いながら、ともに流れてゆく、その冷たい感覚。さあさあと頭の中で音がする。脳みそをながれる髄液、全身を巡る血液、神経の中の電気信号の、視覚と聴覚の幻。

ああ、流れる速さを、同じにしなれば。彼女と、この花ばなど。水の外から、哀切な音色が流れてくる。……あれは、二胡に簫、それから、秦琴か。

楽団が近づいてくるように、音色はだんだん大きくなる。水面が

急に明るくなり、きらきらと鮮やかな光が乱反射したと思うと、少女の体は材木のようにくると反転し、背中をこちらに向けた。あたりの花かたまりがはらと散華して薄紅が舞う。手を伸ばす、あれ、手がない。俺のからだはここじゃないのか。じゃあどこへ？

視界が揺らめいて、少女の体が消えると同時に音楽も止まった。

水面に向かって気持ちだけでもがくうち、視線が一線を越えて、水の外に出た。

広い、広い川の上に、赤い提灯をずらずらと灯した祭り船が遠ざかってゆく。幽かに音色が聞こえてくる。リンはあの上に引き上げられたのか。呼ぼうにも実体のない自分からは声が出なかった。だめだ、もう届かない。薄い霧の中に船は消えてゆく。果ても見えない。視界はただ霧の中に滔滔と流れる川だけになった。

と、そのとき。遙か彼方から、ちいさな悲鳴のような鳴き声が聞こえてきた。

にあーお。にあーお。……にああああお。

……シヤラ！

おまえ、どこにいる？

電話にもメールにも出なくなったSYOUを心配して北原哲夫が部屋を訪れたのは、休み明けを二日後に控えた午後だった。

生活感のない冷えた部屋のベッドにただ寝転がるSYOUを見て、彼は最初にそっと呼吸を確かめた。頬に触れ、名前を呼ぶと、SYOUはゆっくりと切れ長の目を開けた。そして眼前に大写しになっている哲夫の顔に眉をしかめ、また眠ろうとする。

「こら、寝るな。もう十分だろう」哲夫は頬を乱暴に叩いた。そして持参した栄養ドリンクやレトルト食品やから揚げやコロッケをサイドテーブルににずらずら並べてただ一言、

「食べ」といった。

SYOUは一分ほどそれらを無言で眺めた後、

「……どうも」とひと言言って、まずスポーツドリンクを飲み、桃の缶詰から静かに食べ始めた。

「いつから食ってないんだ」

「よく覚えてない」

「あれからどこにもいってないのか」

「ずっとここにいた」

「病気が、お前。どうしたんだ」

「わからない、ただやたら眠くて、ずっと寝てた」

「……」

何も言わず事務的に食べ物を口に運ぶSYOUにひと言

「うまいか」と聞いてみると、

「今考えてるところ」と言ってから、から揚げに手を伸ばした。

ひと口食べて、「あ、うまい」とつぶやいてSYOUが目を上げると、目の前の哲夫はろうそくを吹き消すような長いため息をついた。

久しぶりに顔を出してみれば、事務所はいつも通りだった。

音楽活動を止めた以外、キャンセルになった仕事も反故にされたものもなく、表面上は事件前と何も変わらずに時は流れていた。

イメージモデルをしているアパレルメーカーのキャンペーンの仕事、子供向けアニメのナレーション、雑誌のコラム、出演する携帯ドラマの下読み。

あの事件について、そして接待だの花園だのについて、社長ももちろんスタッフも口に出すことすらしない。あれほどの騒ぎが、SYOUにとっては、まるで自分の身にだけ起きたなにかの幻のように思えた。

変化は、SYOUが所属するレコード会社のHPから彼の名前が消え、かわりに鳴り物入りで伊藤詩織が音楽デビューしたことだっ



た。事件後、怪我が癒えるとすぐ、あらかじめ準備されていた詩織の歌手活動は広範囲に展開され、S Y O Uの抜けた穴は順次詩織がカバーしていく形になった。

そのころからメディアで詩織の姿を見るたびに、S Y O Uの頭の中で能天気なB G Mが流れるようになった。

オクラホマミキサー、別名、藁の中の七面鳥。

理由を考えて、思い当たったとたんS Y O Uは苦笑せずにはいられなかった。

ああ、そうか。……こいつは、幼稚園の「椅子取りゲーム」のとき、いつも流れていた曲だ。

「あつという間に、もうこんなですよ」

新入りのスタッフが抱えてきた段ボールには、歌手活動中止宣言をしてから倍に増えたファンレターやプリントアウトしたメールがどっさり入っていた。

「ありがとう」

ひとつひとつ手に取り、目を通してゆく。

どうして歌手やめちゃうんですか。続けてください。

一時的なものですよね？ ただのお休みですよ？

ライブがなくなったら、直接会う機会が減っちゃう。寂しいです。寂しすぎます！

……あんな歌を、ほんとにそんなに聞きたいんだろうか。

ありがたい、済まないと感じると同時に、S Y O Uは他人事のようにならずにはいらなかった。

簡単に受け入れられ、軽く消費されていくような、自分の歌はそんな口当たりのいいものだったんだろうか、本当に？

明日で世界が終わりでも、金かね金金金寄せ

！！

カバが死ぬ！カバが死ぬ！インドのどこかでカバが死ぬ！いな

いはずのカバが死ぬ！

バカの群れの中でカバが死ぬ！

棘のような視線だけを残して火を浴びて、この身を燃やせば思  
いはかなう……

「社長が呼びです」

入って間もない、雑用係をおもにやらされている新人の女優が呼  
びに来た。手紙の束を置くと、無意識にカバの歌を口ずさみながら、  
SYOUは社長室に向かった。

「けっこうあれから頑張ってるな。で、CMの仕事が来てるんだが、  
今度は大手だぞ。風邪薬のS社と、外食産業のR」  
赤ラークに火をつけながら、関岡社長はくぐもった声で言った。

「……すごい。……ですね」

あれは口約束ではなかった。自分のしたことがどこでどうつなが  
って、その仕事をもたらしたのか、混乱する頭で追う間もなく、社  
長は言った。

「これからはますます身边に気を付けて、騒ぎを起こさないように  
しなくちゃな。まあ、ああいうことがあった後だからなおさら大丈  
夫だと信じてはいるが」

「……」

「どうした」

「それって、契約期間は……」

「どちらも一年」

SYOUはななめ上に視線を投げた。

「おい、何を考えてる」

視線をふつと社長に戻す。

「お前、まさか、一年以内にどうこう……とか考えてないだろうな」

「俺、芸能人に向いてないと思うんですよね」

「なんだ今さら」

SYOUはソファに背を持たせるようにして、真剣な顔で社長を見た。

「たくさんの手紙をもらっても、ありがたいとあまり思えない。最後の最後まで、やっぱり感慨も何もなかったんです」

「だから？」

「少人数のライブハウスで観客にライブとかしてる時はあったんです。聞いてくれる側に届いてる、という一体感というか充実感が。でも、今は……」

人に金もらって生きる限りは、自分の歌を聞いたり芝居を観たりしてくれる不特定多数の人に対する基本的な愛情がなければだめだと思うんですよね。その人たちに大切な何かを届けたいという思いが。俺にはそれが無い。資格がないと思う」

「そんなもんだ。お前は厳しすぎるんだよ、自分の感性に対して。ファンへの愛情なんて半分以上はフェイクでいいんだ」

「でも……本当にファンのことを思って、愛情をもって接することのできる誠実なタレントもいる。いるんです。彼らにとっては、歌はファンへのプレゼントなんだ。でも……」

口を開いてから言いよどみ、SYOUは思い切ったように先を続けた。

「自分としては、自分の歌は、なんていうか自分のヤバイ部分を恐れながら生きてきて、その解放区だった。そのままでは外に出せない、世界と自分とのずれに対する恐れと怒りというか。」

愛とか絆とか理解という耳に優しいことばにいつも苛立ってて、それを自分語に作り替えて叩きつけてた。結局、自分の為のものだったんです」

「……で？」

だが芸能界という世界は何でも大口をあけて飲み込む。その歌を

商品としてルックスとセットで取り込んだのちに、S Y O Uのイメージは一つのキャッチコピーに置き換えられた。

< かつこよくて危なそうで理解不能でステキ >

何をやっても歌ってみても、すべてはそのひとことに吸い取られてゆく。アイドルというオブラートが、自分を包み込んでどうしてもほどけてくれない。

どう装っても、過去は変えられないのに。

……だがそんな思いを受け取ってくれる気が、社長にはさらさらないのは表情を見れば明らかだった。S Y O Uはぼつりと言った。

「いつも、思ってた。」

俺には、ここにいる資格がない。そういう身分じゃない。

……これ以上仕事を広げると、かえってまわりに迷惑をかけるような気がするんです」

社長はじつとS Y O Uを見ると、言った。

「もしかして、過去のことを気にしているのか」

「……………」

社長は灰を落とすと、サングラスの向こうの目を和らげて言った。  
「お前、勘違いしてないか？ 自分を人殺しだとか人殺しの子だとか決めつけて、歪んだヒロイズムに酔ってないだろうな。」

いいか、お前は当時十四歳だった、そして母親を拉致して連れ回していた犯罪者から母親を守ったんだ。それが事実だ。その男が血縁上のお前の父親だという確証もない。結果的にその男が命を落とすことになるうと、お前に罪はない。だから許された。一応隠してはあるが、メディアだって見て見ぬふりをしてきている部分もある。世間の恨みを買って 餌食にならない限り、それはお前に対する刃にはならない。

いいか、愛されることだ。世間に愛されていれば、同じ過去でも世間は同情を持って見守る。叩かれる側になれば、それは付属物をつけた武器になる」

「……………」

「一つ付け加えさせてもらえば、お前は事務所に与えた損害も忘れてはいないよな？ それをきちんと返していくのがお前のこれからの義務じゃないのか。お前には自分でも自覚してない魅力と才能がまだまだある、それをこれから生かして行け。特にCMはまたとないチャンスなんだから、きちんとこなせよ」

「……はい」

ぐつの音も出ないままS・Y・O・Uは部屋を出た。そして足元を睨んだ。

「……愛される？」

愛することもできないのに？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1708ba/>

---

酔 迷 宮

2012年1月13日18時53分発行